

● 第一章

一・初めの言葉

¹ 初めにあつたのは
神さまの思いだつた。

思ひは神さまの胸にあつた。
その思ひこそ神さまそのもの。

² 初めの初めに神さまの
胸のうちにあつたもの。

³ 神さまの
思ひが凝^{こも}つて

あらゆる物^{もの}が生れ、
それなしに

生れた物は一つもない。

⁴ 神さまの思ひには

あらゆるものを生かす力があつて、
それはまた、

生きる喜びを人の世に
輝かす光だつた。

⁵ 光は人の世の

闇を照らしているというのに、
闇に住む人はそのことに
気がつかないでいたのだつた。

⁶ 神さまに遣^{つか}わされた一人の人が現われた。その
名はヨハネ。⁷ この人が来たのは、世を照らす光に
ついて語つて聞かせ、これを聞いた人皆に、いかに
もそうかと納得させるためだつた。⁸ その人はその
光ではなくて、光についてあまねく世に知らせよう
とて来た人だ。⁹ その光こそはまことの光。人の世
に来て、全ての人を照らす光だ。

¹⁰ 神さまの

思いが凝^こつて人となり、
この人の世におありなされた。

人の世は神さまの

思いによつてなつたのに、

この世はそれがわからなかつた。

11 折角^{せつかく}我が家^がに來られたというに、
家族は皆でそつぽを向いた。

12 だけれども

神さまのその思いを

おのが心に受け申し、

それに我が身^みを委^ゆねた人を、

神さまは、

わたしの子だと言いなさる。

13 この人たちは、

血筋によらず、

体の欲するところにも、

男の欲するところにもよらず、

ただ神さまの
思いのままに
そつなつたのだ。

14 神さまの思いが

こつして人の体をまつて、

われらが間に住まいしなされた。

われらはこの方の

輝くようなお姿を見た。

父^{とと}さまからよこされた

一人息子^{むすこ}のこの方の

優しくて、親切で、

嘘偽りの影もない、

輝くようなお姿を見た。

15 ヨハネはこの方のことを世に知らせようと、声
を上げてこつ叫んだ。

「わしの後から來なさるお方は、
声

わしよりはるかに勝^{まさ}つた方だ。

わしより先に居なかつたからだ。』

わしがこう言つたのは、

まさにまさにこのお方^{かた}のことだ。』

¹⁶ 優しくて、親切で、

こぼれるほどに愛嬌^{あいせう}がよい

このお方からわれわれは

恵みの上にもさらなる恵みを

背負いきれぬほど

いただき申した。

¹⁷ 人を導く神さまの掟^{おきて}は、

モーセを通して授けられ、

神さまの優しい親切と、

人を幸せにするまことの道は、

お助けさまなる

イエシューさまによつて示された。

¹⁸ 誰もまだ

神さまのお姿を見た者はない。

神さまの一人息子^{ひとりご}が

それを見せてくださった。

この人こそは父^{とと}さまの胸の思いだ。

神さまのお姿そのものだ。

二・お水潜^くらせのヨハネの言葉

参照 マタイ 3 1-6、11-12、マルコ 1 2-8、ルカ

3 1-6、15-18

¹⁹ ヨハネの言つたことというのは、次の通りだ。

ヒエロソリュマのユダヤ人^{びと}「の頭^{あたま}」たちは、祭司^{かんさぎ}

衆とレビ衆とをヨハネのもとによこして、こう尋ねさせた。

「そもそも其^その方^{ほう}は何者^{なにもの}やう?」^問

²⁰ ヨハネは包^{つつ}むことなく、隠^{かく}すことなく、はつきり言つた。

「わしはお助けさまでは^いぢやぬ。」

ヨハネ福音書序説

(ヨハネ福音書一章一一八節)

マヌエルが、ヨハネ福音書の冒頭を朗読してくれた。さて、私たちは次の一節について、順次に話し合った。

はじめに御言葉^{みことば}があつた。御言葉は神とともにあつた。御言葉は神であつた。

初めに長い沈黙があつた。

それからフェリペが口を開いた。——キリストは全民族にとって、非常に大切な神の知らせを運んで来た。ということはキリストが言葉だという意味だ。ただし、何かどうでもよい言葉が問題になっているのではなく、偽りのない真実^{いつわ}の言葉が問題になっているんだ。そしてその言葉はこの世に属するもので、人間たちのもとに止まつた。

今度はフェリペと同様、この教会の教区民の青年アレフアンドロが話した。——僕が思うに、キリストがここで《御言葉》と言われているのは、神がキリストという人格を通じて、自分を表現したと

いうことじゃないのかな。神は迫害を起訴し、それを言うために、キリストという姿のうちに現われたんだ。「ここに不正があり、悪がある。貧しい者と富んだ者がいて、地上は少数の者のものである」。そしてまた、新しい生命と新しい真理、一言で言ってしまうえば、社会変革ってことになるかな、そのことを言うために現われたんだ。神はこの言葉で人間を解放したんだ。

私は言った。——アレファンドロの言っていることは正しい。聖書では、あらゆるところで神は不正を訴え、正義の世を告知している。すなわち、それが神の御言葉みことばというわけだ。今、新たに生じたことは、この告知がキリストという人格によって、肉として地上に出現したということだね。

レオネールが発言した。——「初めに」ってことは、この世の初めということだろうか？ それともイエスの生涯の初めに関係があるのだろうか？

私は言った。——世の初めのことだろう。ヨハネは彼の福音書を、創世記と同じ言葉で始めたというわけだ。「初めに」とね。まるでヨハネは、天地創造の新しい歴史を書こうとしているかのようだ。

レオネールが即座に尋ね返した。——それじゃあ、この御言葉みことばってのは、約束みたいなものなんですか。だって、神は人間に救世主メシアを送るという約束のもとに、人間をお創りになったんでしょ？ 違いますか。

この時、ちょうどヴェネズエラから私たちを訪問していた、私の友人のアンティディオ・カーベルが話し出した。——私が思うには、この《御言葉》という表現は、ここでは幾つかの意味を持っていると思います。そして私たちは他の意味を穿鑿せんさくする前にまず、最も重要なものを探し出さなければ

ならない。《御言葉》という表現のこの第一の意味は、聖書の原典そのものが私たちに語っている。私ならここをこう読みます。「御言葉は世の初めにはすでに存在していた」と。だから、今、神がキリストを通じて、私たちに伝えようとするそのことも、神においてはすでに存在していた、ということですね。この序説の終りの部分では、こう言われている。「かつて、神を見た人はひとりもない。父と結ばれ、ひとり子として生まれたその息子が、私たちに神の存在を告げた」。私は、キリストの第一義的な意味は、神は誰かということ人間に語る、その言葉にあると思う。なぜなら、人間は神を見たことがないんだから、また人間は、見ることができず、触れることもできないものを、認識することはできないんだから、神を識らなかった。神が何者であり、どのような物であるかを、われわれに教えることが《御言葉》の使命なんだ。以上のことを、キリストは彼の生涯と行為を通して解き明かされた。キリストはこのたった一言を、彼の死まで行い、否、死後にも、今もってこの言葉は何度も繰り返されている。……私は解っていない、私はここで話すことを怖れている。大学が私をこんなにも墮落させたんだ。……

アンティディオが鋭く話を中断した。静寂があった。それから私は、次のように言った。——それは本当かも知れない。すなわち、言葉というのは伝達を意味している。言葉によって私たちはちょうど、今、私たちがここでこうしているように、他の人々と意志を通じ合う。同じように神も、私たちに自分というものを伝えようとした。神はキリストという人格を通じてこれを実行した。だからキリストは神の御言葉であり、神と人とを繋ぐものなんだ。

今度は年配の農夫のひとり、フェリクスが発言した。——御言葉ってのは、たとえば俺が子供らを指図したりするような教えることです。

すると青年たちの中からオスカルが言った。——《御言葉》っていうのは、「互いに愛し合うように」という神の命令でもあるんだ。

さて、非常に年若いフェリオ。——《御言葉》って言うのは、僕は思うんだけど、ひとりの人間が、他の人に言い、他の人が聞くって、そのことじゃないかな。神の言葉だって、僕たちがそれを聞くように存在している。そしてまた、それによって僕たちは神に答えようとする。

フェリオの父親マルセリーノ。——俺は聖書の神の御言葉ってのは、穀物の種と思って読んで来たんだがね。なぜかって俺たちは種を播き、種は増える。そして後で俺たちがそれを食べる。そんなふうに、神の御言葉も俺たちのなかで増えて行く。そして食糧となるんだ。それから、俺たちはこの食糧を分かち合わないかならないんだ。

さて、私たちは第二節を読んだ。

御言葉ははじめ、神とともにあった。

この一節についてアレファンドロが言った。——これは御言葉は神とともにあったというのを、もう一度繰り返しているんだ。ヨハネはこのことを強調したかったんだ。ヨハネは言っている。神は原

初から語っていると。誰と？ 神とかな？ 神は複数の人間の統一体で、だからそれは対話になるわけだ。今度は神が人間と話す。この神の御言葉とはイエス・キリストのことだ。彼は、私たちが互いに愛し合うようにした。神は愛の言葉なんだ。

万物は御言葉によって創られた。創られたもののうち、ひとつとして御言葉によらないものはない。

レオネール 当たり前さ。なぜって、神と神の御言葉とは同じものなんだ。神が創られたすべての物、これらを神は御言葉によって創られた。そして、キリストがこの世で話したことも全部、神によって行われたんだ。神は自分自身を伝えるために、われわれをお創りになった。そうしてから神は、自分の御言葉を送られたんだ。

アンティディオ レオネールは、神がその御言葉でわれわれを創ったと言っているわけなんだけど、聖書も、神が御言葉によって世界を創られたと言っている。それから天も地も水も動物もそうなんだ。創造という業わざと物を言うことは同じなんだ。創造ということは、自分を他人に伝達したいということだろう？ 人が何かを創るということは、自分の何かを認めさせたいということだ、たとえば、詩を書いたり、歌を作ったり、ここでもオスカルやエドアルドのようなソレンチナーメの絵描きが、一枚の絵を描いたとする。また家具職人が机をひとつ製作したとする。労働者はみんな

自分の労働によって、自分の創ったものによって、自分自身の何かを認識させようとするわけだ。神も、光や星や空や大地を創られて、自分自身を表現し、自分自身を伝えておられるんだ。

私は言った。——ギリシア語で聖書という言葉は、詩や韻文の《創作》の意味に用いられていた。なぜなら創造と文学とは、実際には同じものだからね。この世界は神の詩なんだ。「光あれよ！」と神は言った。そして光ができた。他のものも全部、まったくこんなふうにしてできたんだ。なぜなら、神は御言葉によって万物を創られたんだからね。神の御言葉が実現した。神の文学は現実なんだ。

アンティディオオが話を続けた。——そして人はいつも、人が必要としている物を創るんだ。ということは、すなわち人は善を創造しているってことなんだ。神が創造された現実には善なんだ。神は「すべて善きかな」とみそなわしている。それに対して悪というのは、この創造物の破壊だということになる。

アレフアンドロ 労働者は神の似姿だ。労働者の創るものすべてが善であり、人間を豊かにするものだ。

私は言った。——そこに労働者の偉大さがある。私たちが持っているものはすべて、まず神により、それから労働者によって作られた。私たちが穿いている靴は、ひとりの労働者によって作られたものだ。衣服はまた別の労働者によって作られた。都市も、そこに存在するすべてのもの、道路だって、橋だってその通りだね。

その時、最後列のベンチに他の内気な人々から離れてうずくまっていた、ひとりのぼろぼろの上着



をまとった小柄な男が私を遮った。私はこの男を識らなかつた。(彼はこの教区外の人間に違いない。)——すべては御父おやの力から出たことだ。そして御父はこの力をその息子に与えた。その息子の力はまたわれわれの力でもあるんだ。

フェリペ それこそすべての労働者の偉大なんだ。労働者は神の力を地上に引き継ぎ、その創造に関わって働いている。だから労働者がこの地上の主あかしでなければならぬはずだ。靴や衣服や食物を十分持ち、あっちこっちへ旅行し、働きもしない、種も播かない、全然何も生産しないような人間たちがこの地上の主人ではないんだ。だけど、あいつらは他の人間の労働の、住居や地所の主人になつてんだよ。

御言葉には命があり、この命は人間たちの光であつた。闇は光を消し去ることができなかった。

フェリペが話し続けた。——不正手段によつて、搾取者たちはこれらすべてのものを乗っ取つたんだ。労働者たちを欺いたんだ。だから、神の言葉が、われわれをこの詐欺から解放するためにやつて来たんだ。

マヌエル 御言葉には命がある、とここには書かれている。命とは光なんだ。神が愛であることは、われわれはすでに知っている。愛は命をもたらすんだから、愛と命とは同じものだ。だが憎しみは死をもたらすだけだ。しかしながら、この地上では愛は悪の真只中であつて、悪が愛に對抗して闘つて

いる。嘘と欺きが真理に抗して闘っているんだ。そしてキリストはわれわれに、われわれが闇をも克服するように、光を、すなわち愛と真理を運んで来た。

見知らぬ男 神は言った。彼の言葉で「光あれよ」と言ったんだ。そしてその後で、神はわれわれのところに、われわれが今、この言葉を理解するように、ひとつの新しい光を与えるために、自分の息子を送ったんだ。

それは、すべての人間を照らす真実の光であった。彼はこの世界にあり、この世界は彼によって作られたのであるが、世界は彼に気づかなかった。彼は自分の屋敷にやって来たのだが、一族郎党は彼を迎え入れようとはしなかった。

パンチョ その人たちは彼が貧しかったし、自分たちの方がずっと重要な人間だと思っていたから、彼を迎え入れようとしなかったんだ。それに彼は不正を、ということは罪を非難して説教もしたんだから。つまり彼らは不義の人だったんだ。

アダーン 今日に至るまで、今もって、彼の家族の者たちは彼を受け入れていない。その証拠として、われわれが目にするすべてが不正にみちた社会だ。

アレファンドロ 神はその御言葉によって物質を創られたが、物質の敵であるようなある種の人間たちがおり、彼らは不正によってその物質をぶち壊している。今、僕は、エルネストがきのう、僕た

ちに読んで聞かせてくれた詩が、さらによく理解できるようになった。あの星たちについての詩さ。そこで言われているのは、すべての物質は愛の法則そのものである引力の法則によって運動している、ということだった。言ってみれば、社会体制というのはこの現実に反するものなんだ。だから搾取者たちは、社会的現実を見ることを欲しない。彼らはイエスを迎え入れようとしらない現実の敵なんだ。

見知らぬ男 教会の中にだって、イエスをまだ理解していない多くの人間がいるさ。俺たちも時によって教会の中に見出すキリストの光は、闇と混ぜ合わされたものなんだ。キリストが生き、多くの人間が彼を理解していなかった当時とまったく同じように、今日だって、キリストの言葉はちよくよく理解されていないじゃないか。だからこそ、不正が存在するんだ。

しかし、彼を受け入れた人々に、彼は神の子となる権利を授けた。

見知らぬ男 われわれみんなが神の子というわけではない。われわれが彼を理解した時だけ、われわれは神の子なんだ。われわれが彼を理解すると、何か新しい受胎みたいなことが起こる。われわれが新たに生まれると、そこでわれわれは神の子になるんだ。

オスカール 僕も解っているけれど、人間がみんな、神の子というわけじゃあない。嘘をついたり、不正を行ったり、利己的な人間はみんな神の子ではないように見えるよ。そんな人たちは、イエスから切り離されてしまっている人たちなんだ。僕は、キリストを理解しようとしなかった人々を、彼が

悪魔の子と呼んだのを思い出す。そしてキリストは悪魔と嘘を同列に置いたんだ。「虚偽の父」と、悪魔を呼んでいる。

エルビスが言った。——つまり、人間が変わる時に、新しい誕生があり、その時、人間は心を入れ替え、善を行い始めるといふことなんだね。それがキリストを理解するといふことなんだ。

フエリベ ここには、「彼は彼らに神の子となる権利を与えた」、と書かれている。この言葉が意味しているのは、キリストは、彼を信じた人々に、彼らが欲することを行う権利を与えた、ということだと僕は思う。すなわち彼らが正しいと思つたようにこの世界を変え、現実を形づくる権利を与えた、ということだ。だがしかし、現実を変革しようとする人々と、それを望まない人々の間には闘争がある。同じような争いはイエスと、イエスを受け入れない人々の間にもあった。

パンチ ム僕たちは兄弟なんだから、神の子なんだ。誰かがこの同胞愛から離れて行くというんなら、彼は神の子じゃない。僕の兄弟でないものは、また僕の父親の息子でもない。

見知らぬ男 キリストの御言葉を理解する人間はみんな、キリストの証を立てるといふ同じ精神を受け継いでいる。だからこそ、われわれはキリストの兄弟であり、同じ父親の子供なんだ。

フエリクス 隣人を愛するってことは、神の子だということだ。神の御言葉を受け入れない者は、愛の命令を拒んでいるのだし、だからまた神の子ではないことになる。

御言葉は肉体となつてわれわれのなかに住まわれた。愛と真理とに満ちて。

私はギリシア語では、この箇所は、「御言葉はわれわれのもとに幕屋^{テント}を張った」となっていることを説明した。これは、出エジプトの時代には、イスラエル人たちが幕屋の中に住んでいたことを証拠立てている。神はあたかも、私たちがこの辺りで「彼は自分の小屋^{ラッパ}を立てた」と言うように、神はキリストを通してご自分の野営の幕屋を張られたんだ。

見知らぬ男 キリストは神の御言葉であり代弁人で、この地上での活ける言葉なんだ。この言葉が世界を変えるだろう。それは強力な言葉で、その言葉によって全世界が創造されたんだ。そして、キリストの御言葉によって語る人は誰でも、力強い人間なんだ。彼らが何かを言うとき、実際にそうなるんだ。

フェリペ 彼らは、もはや神ができなかったことを、その御言葉によってなし遂げるんだということを考えてみてくれ。神は、神の仕事を地上で完成する力を人間に与えたんだ。人間が自分たちでできることを、神は人間から奪おうとはなさらないだろう。だから、われわれは神がすべてを成し遂げられるのを待っていることはない。大事なことは、われわれだって、それをやることのできるってことを知ることだと思ふんだがね。

私 神が人となられたように、今、人も神なのだ。まず神はひとりの人間になられた。すなわち、イエス・キリストになられたわけだね。それから後に、歴史上のすべての貧しい人、迫害を受けている人となったのだ。御言葉は今や民衆となった。今、神の仕事を行う民衆となったんだ。

フェリペ なぜかって？ 神がそれをご自身でなさることは、もう必要ではなかったからさ。

私 神は今ももう、何もこれ以上なされなければならないことはない。神は天地創造の幕をお始めになったが、その後は人間がそれにさらに手を加えるように、人間の手にそれを委ねられたんだ。

オスカール もし神が今やこの世で何もなさらないとしたら、僕たちはこの世界でとても大きな責任を負っていることになる。その責任によって、神から引き離された人々は僕たちを認め、神の子、僕たちの兄弟になり始めるんだ。これが僕たちの闘いの目標に違いない。すなわち、みんながひとつになることなんだ。

ラウレアーノ そうだ、世界に秩序をもたらし、この世に正義を置くことが、私たちの課題なんだ。一言で言えば、世界を新たに形成することが私たちの使命なんだ。

律法はモーセによって与えられたが、愛と真理とはイエス・キリストを通じて世にあらわれた。

フュリオ ここでは愛と真理とが共に挙げられている。真理のないところには、愛も存在しないからこそ、真理はとても大切なものなんだ。

ロベルト 真理の反対は欺き、あるいは嘘ですよね。すると私たちが真理を言わなかったとすると、私たちは他の人間を欺くというか……もしそう言っていいたとすると、他の人間を搾取していることになるんですね。

アレファンドロ 搾取というのは真理の逆なんだ。あまりにも多くの虚偽があるから、あまりにも多くの搾取が存在することになる。

グロリア 搾取っていうのはあらゆるところにあるじゃない？ それなのにみんなそれを搾取って言わないで、権利だって言ってるわね。

私 そして窃盗は個人財産と呼ばれているわけだ。さて、私たちは愛と真理とが同じものだということを見て来た。そして不正と嘘もまた同じものだ。ここでは、「律法はモーセによって来た」と言われている。だが律法は、言うなればひとつの掟、宗教的な戒めでしかなかったために、何も変革することがなかった。しかしながらイエス・キリストによって、何か現実的なものがやって来たんだ。すなわち、愛と真理だ。ここでは愛と真理とが肉体になったという言葉が、私たちに述べ伝えられている。

神を見た者はひとりもない。だが父と結ばれている、神のひとり子として生まれた息子が、神をわたしたちに告げ知らせた。

エルビス キリストは、神とはいかなるものかを、僕たちに示された。神が愛であるということも示された。そして神は、この地上で互いが愛し合うように望まれた。

グロリア 誰も神を見た人はいない、と言うけれど、私たちは神の御言葉を聞いたわ。そしてこ

の御言葉が神を認めさせてくれたわ。

ラファエル まったく、その通りだ。

締めくくりにするために私が言った。——ラファエルが言ったように、まったくその通りだ。ここで私たちが読んだすべては、イエス・キリストが神の御言葉であるのと同じように、神の御言葉なんです。きょう、私たちが討論し合ったこの章は、福音書全体のうちで最も難しい章なんだが、私たちはすべてを非常にはっきりと見ることができた。この私たちの真中にいらしたイエス・キリストが、私たちを照らして下さったからだ。イエス・キリストは、福音書記者ヨハネの言う通り、すべての人間を照らす光なんだ。そして、彼は私たちに神を認識させるために人となられたのだ。